

東京冀北会会報

東京冀北

第23号



東京掛中・掛西同窓会会報

第22回東京冀北会総会・懇親会会計報告 (2010.11.10)

出席者	
会 員	91名
来 賓	5名 (掛川西高等学校校長他1名)
計	96名
有料出席者	91名 (元総掛中1名は年会費のみ徴収した)
50名会費納入	66名 (198,000円) 一般会計 収入扱い
祝儀	1件 (掛川西高校長、同窓会副会長他2名)
奇贈品	3件 (赤岩 寛様(高10) 竹原繁男様(高16) 松井 郎様(掛川市長))
収入の部	
総会参加費 (7,000円×91名)	637,000
祝 儀	30,000
計	667,000 円(A)
支出の部	
ハーティ費 (サミ高松・看板費含む)	546,140
伴走者お礼・小代	20,000
福引景品代	28,400
雑費(振込手数料、写真費等)	5,210
計	599,750 円(B)

差 収 入 (A) 677,000 - (B) 599,750 = 107,250 円
↑ 一般会計に振り入れ

平成23年11月30日

東京冀北会 事務局長 山崎 進

平成22年度東京冀北会収支報告 平成22年1月1日～平成23年3月31日

収入	
前年度繰越金	344,657
年会費 (郵便振替分)	531,000 (177名)
” (銀行振込分)	18,000 (6名)
” (現金納入分)	198,000 (66名)
総会懇親会参加費	637,000 (91名)
役員・幹事会費 (個人負担)	172,000 (43名)
雑収入 (祝儀・預金利息)	40,008
計	1,940,665 円 (A)
支出	
印刷費 (総会通知 1式 会報 宛名シール 封入作業費他)	433,020
総会通知郵便費 (1,151通)	146,080
総会通信後納費 (339通)	22,035 円
総会・懇親会費	569,750
会合費 (幹事会・役員会等)	247,680 円
出張・祝儀費 (掛川・総会出席)	25,000
通信物流費 (郵便、宅配便等)	70,019
事務費 (事務用品、管理費等)	97,474
計	1,551,228 円 (B)

(収支残高) (A) - (B) = 389,437 円 (次年度繰越金)

※1 年会費納入は元総掛中1名は年会費のみ徴収した
※2 役員・幹事会費は個人負担 172,000円 (66名×2,600円 + 43名×4,000円) 全徴収

会計監査 遠藤 義昭 (高16同窓)
会計監査 森田 重敏 (高21同窓)

注 1 本会有料出席者は会員91名 来賓5名 元総掛中1名であった

校 歌

作詞 藤井金吾
作曲 堀 福寿

一、岩根こごしき天守台
その麓にぞわが校は
基定めて逆川の
栄え行くこそ楽しけれ

二、雨降り嵐すきぶとも
指してや行かむ小笠山
希望の懸を射るまでは
めげず撓まず屈折れず

六、やがてまことの勲なし
誉れは栄ゆる百々錦
飾りて花の色そへよ
大和島根の山桜



良い政治主導を望む



東京冀北会会長 河原崎 守彦
(高九回卒)

私は、この度東京冀北会会長職を退くことになりました。この四年間、皆様の暖かいご支援とご協力により、不十分ながらも職務を果たすことができましたことを、心から感謝申し上げます。本会の若返りなどの課題への対応が思うに任せなかつたことを反省しつつ、今後は、一会員として新執行部をサポートして参りたいと思っておりますので、変わらぬご厚誼をよろしくお願い申し上げます。

最後に、大言壮語を申すことをお許しいただき、一言だけ最近の世情について感想を述べさせていただきます。それは、政治主導ということについてです。近年、政治主導が金科玉条のように言われておりますが、私の拙い考えでは、政治主導は手法であつて政治主導ならどんな政策でも良いというものではないこと、政治主導にも良いやり方と悪いやり方があること、そして更に重要なことは、戦後数十年にわたるわが国の政治と行政も政治主導であつたという現実を直視する必要があるということです。それなのに、近年官僚主導であるかのように言われるのは、何故でしょうか。私見では、それは官僚の力が増したからではなく、バブル崩壊後のわが国経済の低迷と人口の減少・高齢化による財政の余力・政策の余力の減少に伴い、政治の出る幕が少なくなつたからであると思ひます。したがって、今、東日本大震災のような困難

編集後記

先ずは三月十一日に起きました東北大震災で多くの尊い命を落とされた被災地の皆様方に哀悼の意を申し上げます。

当日私は家内と千葉県習志野市の谷津干潟を散歩してました。午後二時、十六分突然大地震が轟きました。立ちついでに揺れのおさまりにまちました。その恐ろしさは言語に絶しました。数分後揺れが収まり我に歸りあたりを見渡すと、街路樹は大きく揺れ、遊歩道のところどころに亀裂が出来、干潟は大きな白波が立ち始めました。とにかく安全の場所に居るため、急ぎ足で干潟を後にしました。何とか駐車場に戻り車の無事を確かめホッとしました。即ラチオを聞き震度6弱を知り、余りにも大きな地震に遭遇し、無事であつたことを家内と確かめました。

七カ月経つた今も被災地の方々には、苦渋の毎日でしょうが一日でも早く元の暮らしが出来ることを祈念します。(Y記)

発行日 平成二十三年十一月十一日
発行者 河原崎 守彦
発行 東京冀北会事務局
印刷 株文洋社

に遭遇しているわが国にとって大切なことは、政が官かを争うことではなく、政・官・民をあげて、外には経済競争に打ち克つこと、内には既得権を排除し柔軟性を取り戻しつつ、政策余力を拡大することであると思います。

ところで、最近行われている政治主導は、わか国を良い方向に向かわせているでしょうか。気になることの第一は、政治本来の役割である基本政策をなおざりにし（或いは論ずるだけで実行せず）、行政への介入に熱心なことです。もとより政治家を通じて行政に国民の生の声を反映させることは重要なことですが、注意すべきことは、政治家は政党色が強いために特定の人々を身びいきすることはないか不安があること、また選挙があるため短期的な利益に重点を置き、パフォーマンス（人気取り）が先行するおそれがあるということです。第二に政策面についてみても、政治主導の名の下に選挙主導が重視され、国の財政の許容範囲を超えたバラマキが、若い世代に大きな負担を残すことがとても心配です。個人の家では、自分の子供に借金をのこすことなど望まないので、公の借金についてこれ程までに鈍感なのは、どうしてでしょう。そしてもう一つ気になることは、ルールの無視が目立つことです。これまで正規の手続きを経て進められてきた政策やプロジェクトを中止・変更することは、開かれた議論の下で行われるべきことであり、一部の者の判断で行われることは、民主主義の基本に反するように思います。欧米諸国の政権交代は、同じルールを守りつつ、政策を変更することであるように思うのですが。

それでは、良い政治主導とは、どのようなものでしょうか。私なりに考えますと（皆様も同じように考えられると思うのですが）、それは、政治の本分である将来を見据えた政策目標を示し、その実現のための基本政策を立て、これを着実に実施することに尽きるように思います。若干敷衍して申しますと、第一に、目標や政

『私を知って下さい』



初代会長 岡本 甲子男
(中三十八回卒)

東京東北会は平成元年に発足し、二十四年目を迎える。歳月の流れに感懐またひとしおです。毎年、年次総会には一〇〇名を超える会員が集い、幹事会もほぼ三〇名の参画により連綿と運営されてきたのは有難い事です。同郷同学の『絆』と役員・会員の熱意のお陰だと思えます。

ところで本会が会員相互にとつて『価値ある友好団体』であり、若い男女世代にとつても『魅力ある集い』でないと今後の存続発展は望めません。これまで社会の各分野で活躍している会員、或いは立派な成果を挙げた諸先輩の講話を聴けたのは、いずれも有益であり好評でした。また掛川から参加して下さいる先生や生徒に接する恰好の場でもありました。

しかし会員相互間の絆を更に深めて意義ある交流の場にしたという希望が多いし私もその必要を感じています。世代を超えて会員諸氏と語り合ってみると、皆さんがそれぞれ多様な人生を歩み豊かな経験や知見、特技を身につけておられる事が判ります。

そこで『私を知って下さい』を提案します。総会や幹事会の席で数人〜十人の方に五分間スピーチ（自己紹介）を予定し、職業や課題、悩み、将来計画や希望、趣味、活動などを自由に披露して頂けないでしょうか？ 或いは会報に投稿し

策については、甘い言葉だけでなく辛い言葉についても国民の理解を得ることが政治の役割であると思います。重要な課題の先送りには絶対に避けて欲しいと思います。また第二に、政策の立案過程における利害の調整を含めて、その政策の実施について官僚組織を（ヤル気を起こさせて）フルに活用すべきでしょうし、重要な局面では政治が前面に立つて調整することが肝要であると思います。そして第三に、結果についての責任は政治が取るべきものであると思いますが、その前段階の発案から実施への過程においても、その政策が国民にどのような効果を及ぼすかについての責任感のある予測が求められると思います。

以上少しく当たり前のことを述べましたが、なぜこのような当たり前のことが実現しないのでしょうか。問題は、従来のように、政と官に任せておいて、外から批判するだけで良いのだろうか、ということだと思います。基本は、やはり国民の眼で監視すること、即ち迂遠ではあっても、国民が政党の掲げる政策の良し悪しを判断し、良いと思う政策についてはその実現を支えていくことであると思います。その場合、我々国民の知りうる情報の殆どはマスコミを通じて流れてくるものですので、本来はマスコミが良否のサジェストをしてくれることが望まれるのですが、ご存知のように、わが国のマスコミは政治的中立を謳っておりますし、国民の関心のある（良く売れる）ニュースに集中しがちであるため、地味な政策より政局中心になりやすい傾向にあるように思います。そこで、国民の一人一人が現実を直視して政策を批判する力を持たない限り、選挙に勝つことだけを目指した人気取り施策が横行し、これまで営々として築き上げてきたわが国の外交、財政、社会保障などの根幹の仕組みが、少しずつ崩れていくように思えてなりません。

て気楽に語って頂けないだろうか？

必ずや会員相互の認識が深まって友好交流から情報交換や協力の場になると思います。

近年は女性会員の積極参加で大変心強くなる前途に明るい希望を感じています。更に若い世代の参加が増えて、私を知って下さい!!と予定時間を争うようになれば東京東北会は知恵と力の交流する魅力ある集いになるでしょう。

木を植えよう

―植樹活動に参加して―



常盤 敏時
(高十回卒)

総合小売業、イオンの関連財団「イオン環境財団」は一九九一年に設立されて以来、日本国内、アジア諸国でボランティアを集めて植樹をして来た。例えば、国内外で新店舗を作る時、その敷地内周囲に小型店で一万余本、大型店で二万〜三万本の植樹をする。中国万里の長城の麓に六年間で百万本の植樹をした。中国青島で、アンコールワットで、ベトナムの古都フエで、ジャカルタで、国内では知床半島で、三宅島で、南島原で等々。その植樹総計は、今年中に一千万本になる見込みである。最近十年間、この財団に關係して毎年十回余植樹の経験をして来たので、植樹への思いを

綴ってみた。

詩人・谷川俊太郎に「木を植える」という詩がある。

「木を植える それはつくなうこと

わたしたちが根こそぎにしたものを」

で始まる。前半三節を紹介し、植樹の意義について考えてみる。二十一世紀は環境がメインテーマになると想定して、本財団は設立された。人類の文明は、水と緑のある所で繁栄し、それらを食い潰して文明は滅びた。ギリシャ文明もエジプト文明も。二十一世紀は水と緑の時代である。小売業が水と緑にどう関係するかの一つの解が植樹である。ボランティアの動員力や新店舗用地に植樹することを中心として。

文明社会には近代化の過程で、木を伐採し森を破壊して開発して来た歴史がある。我々が植樹する意識の底には、詩人が言うように、常に「償いの心」があるように思う。

新店舗用地の周囲に植樹するのは、新しい「ふるさと森造り」として前向きであるが、万里の長城やベトナムの古都フエにしてもその植樹は、過去破壊したものを復活するという「償いの植樹」の場合が多い。詩人も、人間が木を切って消費して来た歴史を振り返り、どこか木に対して申し訳なさを感じる、と述懐している。

明治天皇崩御後、全国からの献木で完成した明治神宮の森のように、新しく造った森こそ、二十一世紀型の森であろう。今という「削減、環境整備保全の典型的な見本である。

第二節

「木を植える それは夢見ること

子どもたちのすやかな明日を」

木の成長は長い年月を要する。その寿命は人間の何十倍である。木が林になり、林が森になって、子供達を育む豊かな環境が長く

めげず たゆまず



金久洋子(旧姓 鈴木)
(高二十一回卒)

子供の頃、私には三つの「好きな朝」がありました。まずは元日。次に運動会の朝。前の二つに劣らず好きなのは、田植えの始まる日の朝です。これらの朝に共通するのは、昨日までの空気が、まるで全部入れ替わってしまったかのような「凛とした朝」であることです。

中でも美しいのは田植えの朝。水をいっばいに湛えた田んぼが、陽光にキラキラ輝いて、きょうの日出を待っています。村人の親戚や知人総出の賑やかな田植えが始まるのです。この日は畦道も主役です。冬には風上げの子供達に踏まれ、春からは次々と萌え出た雑草のため存在も危うくなった境目が、この日のために塗り替えられて、角もくつきりと直線に決めて、鈍色に光ります。この畔を裸足で歩くには半生乾きぐらいの時が、最も心地よくなじむのです。

実は私の家は農家ではありませんが、当時の学校には「田植え休み」があり、友達のお手伝いをお手伝いさせていただいたのです。手伝いか、足手纏いか、おそらく後者に違いありませんが、今となっては大切な思い出です。

あれから約半世紀、私は六十歳となりました。長兄(高16)が私の年で亡くなりましたので、いっそうの感慨をもってこの年を迎えました。

保全される。植樹は将来の健全な命を育てる準備作業だ。木や森がなければ、地球上で私達を含めた生物が現在の生活を維持できない。突き詰めれば、植物だけが地球上で「唯一の生産者」である。植樹とは、この生産者を生み増やす作業である。理を分ければ、これ程根源的で、生命の維持に重要な活動はない。

第三節

「木を植える それは祈ること

いのちに宿る太古からの精霊に」

古くから日本人は、古木や大木に注連縄(しめなわ)を張り、神が宿っていると崇めて来た。御神木である。この感覚は、アニミズムの感覚で西洋の宗教観とは違うように思う。自然に対して畏怖を感じて、自然を大切に思う心である。「祈る」とは、前述の「唯一の生産者」に対する感謝の気持ちに通じるものであろう。木や自然に対する感謝に限らず、すべてのことを太古からの精霊に感謝する気持。植樹は、感謝の気持を将来につなぐ作業である。

思い付くまま植樹について綴って来た。気が付くことは、私達ももっと多くの場所に、将来のために植樹する必要があると言うことだ。例えば、岐阜県各務

原市や愛知県一宮市のように、

全国の小・中学校の敷地内周

囲に植樹し「母校の森」を作

ることが、教育上からも、豊

かな環境作りの上からも、防

火上からも、大震災に対して

も、重要なことであると、東

北大震災は教えている。

以上



還暦以後の第一歩として、私は四月から「東京農大グリーンアカデミー」という成人(五十歳以上)のための園芸教室に週三日通い始めました。午前中は各教授による講義を受け、午後は実習です。地下足袋を履いて、土を作り、種を蒔き、移植して、支柱を立て、誘引してと目まぐるしく作業は続き、やがて美味しい夏野菜が生徒の家の食卓を飾りました。ここは「シニアの幼稚園」かも知れません。男も女も年齢も隔てなく和気藹々、土を相手に大喜びなのです。から。「土」は本当に人を幸せにしてくれます。

三月に起きた原発事故は私達を育んでくれた「土」に放射能を撒き、今後を不安にしまいました。

失われた「土」を取り戻すのにどれ程の時間が必要なのかはわかりませんが、植物も放射能除去に手を貸してくれそうです。健全な土や今までと変りない美しい朝を子や孫に残せるよう身のまわりの小さな事から積み重ねてゆきたいと思います。

今こそ我らが応援歌「めげず、たゆまず、くつおれず」で行きましょう!!

●昨年の総会スナップ●



大家 陸実 中三十九回卒
私も今年で八十七歳となります。日常生活は何とか平穏無事に過ごしております。しかし余事にはもう考えが及びません。

竹原 孝一 中四十回卒
元氣過ごしており、テニスやグラウンドゴルフなど楽しんでおりますが、今回は開催日で、私のタイ国行きと重なりましたので、欠席致します。

伊藤 寛治 中四十一回卒
天守台から北を望むと一本道の西郷県道、それが私の郷里です。野球好きな級友がいて、掛西の奮闘状況を逐一知らせてくれます。ご盛会を祈っております。

大井 利作 中四十三回卒
幹事さん、お手数に感謝します。余生を愉しんで過ごします。皆さんとお会い出来るのを楽しみにしています。

内藤 芳男 高三回卒
二十三回総会開催に当たり幹事、事務局のご尽力に感謝申し上げます。小生この程、高齢者(介護保険非適用者)の介護を支援する内閣府認定NPO法人に参画し、業務を進めております。関心のある方はご連絡下さい。

花島 美喜子 高九回卒
夜の外出がだんだん面倒な年になりました。今回は同期の角皆さんのお話と会長河原崎さんへの感謝を込めて出席したいと思いましたが、有難うございました。よろしくお願ひします。

山本 静馬 高九回卒
完全にターヤール、スポーツクラブと図書館の毎日です。

村田 繁 高十回卒
公立・高崎経大硬式野球(関甲新)大学連盟の監督をしています。

刀根 ちか 高十一回卒
まだまだ暑い日が続いていますね。今年には本当に大変な年になりました。心していろいろな事に思いを込めて過ごしたいと思っています。

鈴木 安彦 高十二回卒
元氣に酒量も減らなくなっています。席できません。

近藤 隆彦 十二回卒
今年は大震災、原発、大型台風とこれでもかの感じでした。人が制御できないことはやっつけていけないとつくづく思いました。

田辺 勝美 十二回卒
金曜日は教授会です。欠席させていただきます。来年の三月で中央

伊藤 聡行 高四回卒
一念発起、再び磯釣り開始! 七十八歳、元氣です。

川島 常雄 高四回卒
いつもご案内有難うございます。自治会活動のお手伝いをしながら趣味を楽しんで平々凡々の暮らしをしております。ご盛会をお祈りしています。

武内 恭久 高四回卒
旧物象師の高4、5の在籍グループ(東京、千葉、小田原)と掛川グループで平成二十一年から交流が続いています。日本科学未来館など見学しました。今年は先端技術館を見学する予定です。ついでに新宿末広亭にも見学予定です。幹事は野崎君です。

松井 喬 高四回卒
当日他に予定があり残念ながら欠席させていただきます。年金生活で細々と日々を送っております。一病(三月)に二週間動脈解離で入院、息災の日々を送っております。

沖野 光男 高五回卒
毎回ご連絡いただきまして恐縮致しております。五年前より体調崩し入退院を繰り返しています。勝手ながら今回も欠席させていただきます。ご盛会でありませう様願っています。

山崎 喬 高五回卒
東北地方大震災で当地も液状化の被害を受けた。最も困ったのはインフラの中で下水道の使用不可能だった。首都圏の震災が、予想されているが、生き延びた後の生命線、水、食糧の次、電気電話は順位は低いと思う。(留志野市在住)

逸見 仲夫 十二回卒
晴耕雨読と言いたいのですが、地域の役が回ってきて結構忙しい毎日を送らせて頂いております。

松村 宏 十二回卒
毎年幹事ご苦労様です。皆さんとの再会楽しみにしています。リフトパレー(大地渓谷)のウガンダからモザンビークの旅から帰ってきたところですよ。

藤江 哲夫 十二回卒
前期高齢者の真つただ中の古希を迎え、次は後期高齢者の喜寿を目指します。

山川 俊宏 十二回卒
「第十二の予言」「ザ・シークレット」「ザ・パワー」など翻訳本、また自分で本も書いています。山川隼矢がペンネームです。

橋山 高昭 十四回卒
趣味、特技の欄を設け、各分野での交流をひろめることを提案します。

天方 信久 十六回卒
原発から100キロ震災前の生活に完全復帰。茨城県産の農産物を購入して下さい。まったく問題ありませんから宜しく。(日立市在住)

鍋代 隆士 高七回卒
東日本大震災では、私自身幸いにも、地震津波被害を受けませんでした。が、ライフライン(電気、水道、ガス)が全面ストップし鉄道も長期間運休となって不便な生活を強いられました。原発事故の影響も小さくありません。(日立市在住)

青野 信男 高八回卒
いつも出席出来ませんが、会報を楽しませて頂いております。夏の高校野球では、沼津球場に母校の応援に行き、若い血潮と感動を貰いました。

川村 弘史 高八回卒
元氣に地域活動に動んでいます。当日は予定が入っており出席出来ません。八月二十日掛川での同窓会に出席して来ました。

小杉 慎二 高八回卒
東京に来て三十年初参加です。よろしくお願ひ申し上げます。

大井 敏子 高九回卒
いつもお世話さまでございます。この夏からオカメインコを一羽預

鈴木 豊 十八回卒
今年の九月で六十四歳になり会社は定年退職となります。十一月月中旬に東京を離れ浜松市浜北区に帰ることにしました。従って東京冀北会参加も今回が最後となります。

石川 清子 十六回卒
退職早六年、あれこれ家の中の片付けをおもいつつなかなか進みません。少しづつでも身辺整理をと感じているところです。

田畑 喜三郎 十八回卒
昨年から会場(中村ビル/高松)のビルは前職の勤務先でビックリしていました。今でも月に二、三回は中村ビルの会社(日経社)に用事があるのも尚更です。

鈴木 良彦 十八回卒
申し訳ありません。会社の仲間との先約が入っており出席出来ません。現在半分リタイアの状態となりました。(週2日の出勤)

加藤 徹 十九回卒
当日は外来日のため失礼致します。震災後の復旧も茨城当地でもまだ続いています。

高橋 八重子 二十七回卒
現在埼玉県の坂戸西高校で国語の

大石 愛祐 高九回卒
当日は2011・11・11と11の数字が三つ続く日のため、一年前に別の行事の約束をしてしまっており、その会是小生が欠けることが出来なため、欠席させていただきます。

杉山 安弘 高九回卒
ここ一年半、それまでに全く経験しなかったいろんな疾患に悩まされましたが、まずまず元氣に過ごしております。(いろんな病氣も友人は、年相応だよ、言って慰めあっています。)

角皆 静男 高九回卒
今日は、地球表層部の半分を占める酸素に比べ、その半分が1/4を占めるケイ素は、地味だが、気候変化や生態系変化に絡んで重要な役割をはたしているという話をする。それに気が付いたのは、1968年11月から110日間の研究航海に乗船し、北緯30度、西経170度から赤道を越えて南緯70度近く(昭和基地より南)まで南下した時だった。詳しくは、当日話しますが、話の途中で結構ですから遠慮無く質問していただきたい。

教員をしており、弓道部の顧問をしております。

近隣の高校で練習試合を行っていただけの方がいらっしゃれば幸甚に存じます。

訃報

原田 博 中四十一回卒
平成二十三年三月十五日 死去

下島 健二 中四十二回卒
平成二十三年九月九日 死去

熊沢 兵次 高一回卒
平成二十三年三月十六日 死去

白畑 司朗 高四回卒
平成二十三年五月七日 死去

内野 貴晴 高六回卒
平成二十三年八月二十九日 死去

小星 幸司 高七回卒
平成二十三年八月二十九日 死去

榛葉 博明 高十二回卒
平成二十三年六月二十九日 死去

鈴木 績 高十四回卒
平成二十三年十月二日 死去